

# Have/Take 軽動詞構文について

西尾美穂

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

A Study of *Have/Take* Light Verb Constructions

Miho Nishio

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Humanities and Social Science Unit*

**Abstract** : Light verbs are often assumed to be devoid of semantic content. In this paper we consider semantic properties of the light verbs *have* and *take*. It is shown that (i) the fact that they combine with different range of nominals suggests that they each have their own semantic content, (ii) though Dixon(1991) claims that the *have/take*-light verb constructions express voluntary activities, they can also express involuntary events, (iii) the relationship between the main and light uses of the verb *take* can be explained by modifying the lexical network proposed by Norvig and Lakoff(1987).

キーワード：英語, 軽動詞, 意味ネットワーク

Keyword: English, Light Verb, Semantic Network

## 1. はじめに

本稿では, have/take a drink のような「軽動詞構文」(light verb constructions)における have/take の意味特性について考察する。まず, 軽動詞 have/take は意味が希薄化・抽象化しているが無意味ではないことを示す。その上で, 動詞 have/take の中核的意味と軽動詞としての用法がどのように関連づけられるのか, 軽動詞としての have/take はどのような意味内容を持つのかを検討する。最後に, Norvig and Lakoff(1987)と Brugman(2001)に基づき, 動詞 take の意味ネットワークを提案する。

## 2. 軽動詞は無意味か

軽動詞(light verb)とは Jespersen (1965: 117)の用語で, *have a chat*, *take a walk*, *make a bolt*, *do a creep*, *get a move on*, *give a glance* などの句に生じる have, take, make, do, get, give などの動詞のことで, 後ろに動詞転換名詞(動詞から派生し, 動詞と同形で, 行為を表す)を従える。Jespersen は, この軽動詞と動詞転換名詞の結合について “They are in accordance with the general tendency of ModE to place an insignificant verb, to which the marks of person and tense are attached, before the really important idea . . .” として軽動詞は無意味 (insignificant)であると述べている。安藤(2005: 41)も同様に「事象目的語をとる動詞は, 日本語の「スル」のように, 動作一般しか表さないの, 意味の重心は, 動詞の拡張ともいうべき事象目的語に置かれている。」(安藤は, Quirk et al. (1985: 750)に従い, 動詞から派生された事象を表す名詞を「事象名詞(eventive object)」と読んでいる。)安藤は, 軽動詞がまったく無意味であると述べているわけではなく, 「動作一般しか表さない」ということは, 個々の軽動詞に意味の差を認めていないと解釈することができるだろう。

生成文法の立場からは, Kearns(1988/2002)が, 英語の軽動詞を true light verb (*give the floor a sweep*, *give a groan*, *have a lick of this icecream*)と vague action verb (*make an inspection*, *give a demonstration*, *do the ironing*)に分類し, true light verb は意味内容を持たないと主張している。Kearns(1988/2002: 12)は, true light verb は, その統語的項構造にしたがって句を投射するが, 語彙概念構造が不活性である(あるいは, 語彙概念構造が次如している)ので, 項に  $\theta$  役割を付与することができないと論じている。Grimshaw and Mester(1988: 229)も, 日本語の軽動詞「スル」については同様に, “The verb *suru* illustrates one kind of light Verb: its argument structure is so highly underspecified that it is incapable of  $\theta$ -assignment of any kind.”と論じているが, 英語の軽動詞については, “Nevertheless, the influence of the Verb itself is detectable in subtle meaning changes. For example, although a spider can *walk*; a spider does not normally *take a walk*.”として, 軽動詞の項構造が軽動詞句の解釈に影響を与えていることなどから, 英語の軽動詞は部分的に指定された項構造を持っており, 「スル」のようにまったく空ではないと述べている。

緒方(2017: 16)も「軽動詞は単に, 語彙的意味が軽くなった透明な動詞で, 名詞化した行為に, 行為性を加えるだけの冗語的表現ではない。意味が軽くなったとしても, 語彙的意味が透明になるわけではない。語彙的意味の何かが残ると考えられる。」と主張し, そのように考える根拠として, 個々の軽動詞によって, 結合できる動詞転換名詞が異なることをあげている。例えば, Wierzbicka(1988: 338)は, have a 構文と take a 構文を比較して, 動詞転換名詞の中には have a と take a の両方に現れるもの, have a の後ろにしか現れないもの, take a の後ろにしか現れないものがあることを示している。

- (1) a. have a look at/a bath/a walk/a lick/a sip/a play/a read/a cry/a cough/a pee/a try/a look for/a think/a suck/a chew/a listen/a feel/a chat/a cuddle/\*a dive/\*a leap/\*a step  
 b. take a look at/a bath/a walk/a lick/a sip/\*a play/\*a read/\*a cry/\*a cough/a pee/\*a try/\*a look for/\*a think/?a suck/\*a chew/\*a listen/\*a feel/\*a chat/\*a cuddle/a dive/a leap/a step

(Wierzbicka (1988: 338))

Live(1973: 42-47), 勝部(2014: 189-191)でも同様の報告がなされている。個々の軽動詞ごとに共起できる動詞転換名詞が異なるということが, 軽動詞の意味特性によるものだとすれば, その意味特性とはどのようなものなのだろうか。次の節で考察する。

## 3. 軽動詞 have/take の意味

Dixon(1991:347-348, 357-358)は, 以下のように have/take 軽動詞構文の意味を記述しているが, これらの意味に対して, 軽動詞はど

のように寄与しているのだろうか。

- (2) In summary, the HAVE A construction carries meaning elements: (i) something done voluntarily, by the subject; (ii) to indulge himself in something he enjoys doing, or which provides relief; (iii) the activity being done ‘for a bit’, at the subject’s whim (rather than to achieve any transcendental goal).

(Dixon (1991:347-348))

(主語により意図的に、楽しいことや気分転換になることにふけるために、(目的を果たすためでなく) 気まぐれによって、「ちょっと」行われること)

- (3) In summary, the TAKE A VERB construction carries the meaning elements: (i) something done voluntarily, by the subject; (ii) often a definite premeditated activity; (iii) generally involving some physical effort on the part of the subject; (iv) just one unit of the activity completed.

(Dixon (1991: 352-353))

(主語により、意図的に行われることで、前もって計画された活動であることが多く、一般に主語の身体的な努力を伴い、活動の単位だけが完結される (take a sniff of itの方がhave a sniff of itよりも好まれ、have a smell of itの方がtake a smell of itよりも好まれる))

Dixon(1991: 351-352)は、take a 構文に生じるのは have a 構文に生じる動詞転換名詞の一部であると述べている (“The periphrastic TAKE A VERB construction has relatively limited use in British English, being restricted to a subset of those verbs that occur in the HAVE A construction.” (Dixon は動詞転換名詞を動詞と考えている))。その理由として take a 構文は have a 構文と異なり「主語の身体的努力」を伴うことを挙げている (“The ‘physical effort’ component explains why one can use TAKE A with *walk* or *swim* but not with *sit down*; with *kick* or *bite* but not with *think*, *talk*, *laugh*, *cry* or *cough* (HAVE A can be used with all these verbs).”). しかしながら、天川(2000: 34)では、look, glance, glimpse は、talk, cough, cry よりも身体的努力が少ないにも関わらず take a 構文に生じ、逆に row は身体的努力を多分に要するにも関わらず、take a 構文に生じないことが指摘されている。

- (4) a. have a look/glance/glimpse/row  
b. take a look/glance/glimpse/\*row

(天川 (2000: 34) )

また、意図性に関しても Wierzbicka(1988)が11種類に細分化した have 軽動詞構文の意味のうち have a fall [slide, tumble]は非意図的であり、Brugman(2001: 568)では、take a spill「転落する」の例を挙げて take 軽動詞構文に非意図的なものがあることが示されている。俗語の take a fall「パクられる」も非意図的な例である。

相沢(1999: 60)は、語彙的動詞の中核的意味が比喩的に拡張されることによって軽動詞の用法が派生されると論じている。動詞 have の場合は中核的意味は「所有する」であり、「具体物を所有する」から「性質、状態を所有する」へ、そこから「行為、動作などの経験を所有する」へと比喩的に意味が拡大するとされる。Take の中核的意味は「自分の意思で自ら働きかけて、手で物をつかんで自分のものにする」であるとされる(相沢(1999: 79))。勝部(2014: 192)でも同様の主張がなされているが、takeの方がhaveよりも中核的意味を残しているために共起する動詞転換名詞がより限定されていると論じている。

相沢(1999)、勝部(2014)が論じているように、語彙的動詞の中核的意味が抽象化されつつ軽動詞にも引き継がれているためにそれぞれの軽動詞の用いられ方が異なるとすれば、軽動詞用法の意味は、どのような比喩的仕組みによって語彙的・中核的意味から派生されるのだろうか。次の節で考察する。

## 4. 意味ネットワーク

瀬戸(2007: 448)の意味ネットワークでは, have の中心義は「〈物を〉手に持っている」で, 特性類似のメタファーにより「物を自分のものとして持っている」(手以外の場所で, 物を所持・所有している)、「〈これから行うべき予定を〉持っている」, 「〈物・人などを〉(ある状態に)しておく」などの主意義に展開する. その一方で, プロセスで原因のメトニミーにより主意義「〈物を〉手に取る」に展開し, 機能類似のメタファーにより, 「〈子供を〉手に入れる」, 「〈情報・楽しみなどを〉手に入れる」, 「〈経験などを〉手に入れる」, 「〈人を〉性的に手に入れる」に展開する. 「〈物を〉手に取る」は, また, プロセスで結果のメトニミーにより「〈飲食物などを〉手にとって飲食するという副意義に展開する. 軽動詞 have は, 「〈経験などを〉手に入れる」という副意義に属することになる. Want me to have a look round, sir?/ I'll have a chat with Jonathan to see if there are any problems./ It was as if I had a bad dream.などの例が含まれる.

Take の意味ネットワーク(瀬戸 (2007: 963-965) )では, 中心義は「〈人が〉〈人 (の身体)・物を〉手でつかみ取る (手で接触することに力点)」であり, そこからプロセスで結果のメトニミーにより「〈人が〉〈人 (の身体)・物を〉手でつかんで移動させる (手で接触した後の動きに焦点が移動)」に, 機能類似のメタファーにより「〈人が〉〈物を〉手でつかむように取り込む (体内に取り入れる)」と「〈人 (の行為) などが〉〈時間・労力などを〉必要なものとして取る」という主意義に展開する. 「〈人が〉〈物を〉手でつかむように取り込む」という主意義は, 機能類似のメタファーにより「〈人が〉〈物を〉自分の物として取り込む (自分の所有にする)」, 「〈人などが〉〈場所を〉自分のものとして取り込む」, 「〈人が〉〈行動を〉自分のものとして取り込む」, 「〈人が〉〈責任・申し出などを〉受け取る」, 「〈人が〉〈感情・見解などを〉受け取る」, 「〈物が〉〈人・物などを〉取り込む」という副意義に展開する. 軽動詞 take は「〈人が〉〈行動を〉自分のものとして取り込む」に属し, take a nap [a rest, a bath, a walk]/He took a good look at the food などの例が含まれる.

瀬戸の説明の問題点は, 軽動詞 have の意味が「〈経験などを〉手に入れる」, 軽動詞 take の意味が「〈人が〉〈行動を〉自分のものとして取り込む」という意図的・能動的なものだけであるということである. 先に見たように軽動詞 have/take はどちらも非意図的な出来事を表すことがある (have a fall [slide, tumble], take a spill [fall, stumble, tumble]). また, 瀬戸(2007: 964)の意味ネットワークでは「〈パンチなどを〉受ける」という受動の意味は軽動詞 take の用法から外れる. しかし, take a punch from は take a punch at と同記事象を逆の方向から見て述べているだけであり, 関連づけて説明されるべきであろう. 次の節では, 瀬戸(2007: 965)で, 「意義展開の基本パターンについての見通しが必ずしも明確ではない」と批判されているが, take a punch at と take a punch from を関連づけて説明している Norvig and Lakoff(1987)の説明を検討する.

## 5. Norvig and Lakoff(1987)

Norvig and Lakoff(1987)は, 語彙ネットワーク理論により, 以下の例に示される take の7つの意味を関連づけて説明している.

- (5) a. John took the book from Mary.  
 b. John took the book to Mary.  
 c. John took the book to Chicago.  
 d. John took Mary to the theater.  
 e. John took a whiff of the coffee.  
 f. John took a punch from Mary.  
 g. John took a punch at Harry.

彼らの説明では, 意味役割が次のように表示される。

Participants:	
A	agent: active actor or causer of an action
S	source: initially has the patient
R	recipient: receives the patient
P	patient: object acted upon or affected by the agent
I	instrument: used to transfer the patient
Settings:	
O	origin: location where patient started out
D	destination: location where patient ends up

(Norvig and Lakoff (1987: 198))

軽動詞用法に関連する部分の概要を見ておく。Take の中心義は Take-1: grab 「つかむ」である。

Take-1: grab
Background Conditions: R is at D, P is at O, O≠D, S≠R, A=R.
ACT: A MOVES P ALONG A PATH FROM O TO D (WITH I)
CONDITION: DURING ACT, A PHYSICALLY CONTROLS P
DEFAULTS:
Result: A receives P
A is human
P=easily manipulated physical object
I=A's arm and hand
O=near A;
D=at A's body
Examples:
<i>The baby took the toy from its mother.</i>
<i>The baby took the toy from the table.</i>

(Norvig and Lakoff (1987: 199))

Take-2 は take-1 から, Semantic role differentiation (意味役割の分化) によって派生する。Take-1 との違いは, take-2 では動作主が受領者ではないことである。

Take-2: take Patient to Recipient

LINKED TO: Take-1

DIFFERENCE: A≠R

Example: *the messenger took the book to Mary*

(Norvig and Lakoff (1987: 199))

Take-4 の意味は, take-2 の意味から以下のようなメタファーによって派生される.

Source domain: taking

Target domain: performing a quick forceful action

Agent →agent

Patient →quick, forceful action

Recipient →patient

Take-4: take action at Patient

LINKED TO: Take-2

DIFFERENCE: THE METAPHOR THAT APPLYING FORCE IS TRANSFERRING AN OBJECT

Example: *I took a punch at him*

(Norvig and Lakoff (1987: 201))

Take-5 は take-4 から Profile shift (プロフィール転移) により派生する. Take-5 では, take-4 と異なり, 結果がプロフィールされる. 動作主は背景化し, 受領者がプロフィールされて主語になる.

Take-5: take action from agent

LINKED TO: Take-4

DIFFERENCE: RESULT IS PROFILED

CONSEQUENCE: R IS SUBJECT

Example: *I took a punch from him*

(Norvig and Lakoff (1987: 201))

Take-7 は, take-1 から「知覚することは受け取ること」というメタファーにより派生される.

Source Domain: receiving

Target Domain: perceiving

Patient →Percept

Agent/Recipient →Perceiver

Instrument →Sense organ

Receiving →Perceiving

Patient moves to Recipient →Percept moves to perceiver

Recipient has Patient + Patient is available for Recipient's use →perceiver has percept available for use

Take-7: Take a glance at

LINKED TO: Take-a

DIFFERENCE: THE METAPHOR THAT PERCEIVING IS RECEIVING

(Norvig and Lakoff (1987: 204))

Norvig and Lakoff(1987)の意味ネットワークでは, 軽動詞 take の用法のうち, take a punch (at/from)のような他者に向かう行為と take a whiff のような知覚・感覚を表すものは含まれているが, take a nap [rest, walk]のような知覚・感覚以外の他者に向かうのではない自身の行為は含まれていない. 岡(2014: 9)でも指摘されているが, これらも含めた take の意味ネットワークを構築しなければならない.

Brugman(2001: 568)は, Norvig and Lakoff(1987)の資料に基づいて take 軽動詞構文の分析を行なっているが, そこでは take 軽動詞構文も次の4種類に分類し, take a walk / shower / spill / fall / rest のような自己指向の行為は, take-1 'grip'のスキーマを表すものであると論じている.

Sensation and perception (subject referent=energy source and energy sink)

*take a whiff / sniff / taste / sip*

*take a look / glance / glimpse*

Self-oriented action (subject referent = energy source and energy sink)

*take a walk / shower / spill / fall / rest*

Other-oriented physical action (subject referent=agent/energy source)

*take a stab / punch / swipe*

Other-oriented physical action (subject referent = patient/energy sink)

*take a hit / beating*

(Brugman (2001: 568))

Take の軽動詞としての用法の根底には, 2つの語彙的用法があるという主張は, OED における take の意味変化の記述とも付合する. OED によれば, take のゲルマン語における最初期の用法は, 'to put hand on' 「手を置く」, 'to touch' 「触れる」という身体動作を表して

いた。そこから 'lay hand upon, lay hold of, grip, grasp, seize' 「つかむ」という意味になった。さらに、道具や身体動作が結果に従属するようになって、'to transfer to oneself by one's own action or volition (anything material or non-material)' 「自分自身の行為あるいは意志により自分のところへ（物質的なものであれ非物質的なものであれ）移動させる」という意味を表すようになった。この意味が take の一般的で通常の意味であり、大きく2つの意味に分かれて、1つは 'seize, grip' 「つかむ」であり、もう1つは 'receive or accept what is handed to one' 「手渡されたものを受け取る」である。この2つの意味の下に 'assume, adopt, apprehend, comprehend, contain' 「引き受ける, 受け入れる, 理解する, 包含する」などの非物質的な意味が従属する。森山(2008: 81)が主張しているように、「語の意味変化は論理的な連続体」であり、「その連続体を構成する各々の意味は、各々の意味変化が生じた時代に生きた人々の認識の現れであるから、「史的」は「認知」に内包される」とすれば、OED に記述されているような take の歴史的な意味変化も、共時的な意味ネットワークを構築する際に参照されるべきであろう。

Norvig and Lakoff(1987)の意味ネットワークにおける問題点は、中心義 take-1 の意味を 'grab' 「つかむ」としながら、その ACT 条件として A MOVES ALONG A PATH FROM O TO D (WITH I) 「A (動作主) が P (被動作主) をある経路に沿って D (目的地) へ移動させる」というように、移動の概念が含まれていることである。岡(2014: 16)が指摘しているように、take が「つかむ」という意味を表す以下の事例において、take は移動を表してはいない。

- (6) a. She took him by the arm.  
 b. He took her hand to lead her out of the gym.  
 c. I took a knife and cut the rope.

(瀬戸 (2007: 964))

これらの例において take は「把握」するだけを表しているだけで、移動させることまでは意味していない。瀬戸(2007: 963-965)で提示されている意味ネットワークのように、中心義は移動を伴わず手で把握することに焦点を置く「つかむ」とし、そこからプロセスで結果を表すメトニミー、あるいはプロファイル転移、により手で把握した後の移動に焦点を置く「手でつかんで移動させる」という意味を派生させる方が、OED に記述されている歴史的な意味変化の観点からも妥当であろう。

ところで、岡(2014: 10-11)は、take 自体は「つかむ」という概念を表すのみで、以下のような事例が移動の意味を表すのは、前置詞 from や前置詞 to に導かれる句が共起するからであると主張している。しかしながら、次のような例では、起点・着点・方向などを示す前置詞句や副詞などが共起していないにも関わらず「連れていく、持っていく」という意味が表されている。

- (7) a. Paul doesn't know the way—can you take him?  
 b. You should have taken your umbrella.

(ジーニアス英和大辞典 s.v. take II6a)

Take が移動概念を含むか含まないかはさらに検討を要する問題ではあるが、ここでは Leech(1989: 67)の記述にしたがって、take には bring と対になる、'make {someone, something} go' という意味があるものと仮定する。

以下に Norvig and Lakoff(1987)の分析に基づくが、中心義を移動概念を含まない「つかむ」であるとして、take の軽動詞用法を導き出す修正案を示す。



自己指向の行為←中心義「つかむ」→「手でつかんで移動させる」

*take a walk*

↓

他者指向の行為 (主語=動作主) → 知覚・感覚

*take a punch at*

*take a look at, take a glance at*

↓

他者指向の行為 (主語=被動作主) → 知覚・感覚

*take a punch from*

*take a whiff of*

中心義「つかむ」からは、機能類似のメタファーにより「ある行動をとる(起動する)」という自己指向の行為を表す軽動詞用法が派生する。中心義「つかむ」からメトニミー(あるいはプロファイル転移)によって生じた「手でつかんで移動させる」という意味からは、機能類似のメタファーにより「他者に向かってある行為をする」という他者指向の行為(主語=動作主)を表す軽動詞用法が派生する。この意味からさらにプロセスで結果のメトニミー(あるいはプロファイル転移)によって「他者からある行為を受け取る」という他者志向の行為(主語=被動作主)を表す軽動詞用法が派生する。Norvig and Lakoff(1987)と Brugman(2001)では、「手でつかんで移動させる」という意味から知覚・感覚を表す軽動詞用法を派生させているが、ここでは他者志向の行為を表す軽動詞用法から派生させることを提案する。岡(2014: 9)が指摘しているように、*take a whiff of*では香りが嗅覚器官に「取り込まれる」ため「受け取る」という概念で捉えられる。「動作を受け取る」→「感覚を受け取る」というメタファーにより、他者指向の行為(主語=被動作主)から「知覚・感覚」(主語=経験者・着点)の軽動詞用法が派生されると考えられる。それに対して、*take a look [glance] at*では、視線が相手に向かって行くので、「他者に向かってある行為をする」→「対象に向かって知覚行為をする」というメタファーにより、他者指向の行為(主語=動作主)から「知覚・感覚」(主語=経験者・起点)の軽動詞用法が派生される。このように考えれば、前者ではofという〈分離・根源〉を表す前置詞が用いられ、後者ではatという〈方向・目標〉を表す前置詞が用いられることが自然に説明できるという利点もある。

今回は、*take*の意味ネットワークについてのみを考察したが、*have*についても同様に、*have*の語彙的(Brugman(2001)の用語では「重い(heavy)」)用法の多義性、すなわち、無意志の「持っている」と意志の「手に入れる」と経験の「経験として持っている」に対応して、軽動詞用法も多義であり、語彙の意味からの比喩的拡張により*have*の意味ネットワークの中に位置付けられると思われる。

(8) 「持っている」I have no money. → have a spill

「手に入れる」Have a seat, please. → have a walk

「経験として持っている」I had the flu last week. → have a shock

(例文 小西(2016: 14, 18, 21))

Haveの意味ネットワークと軽動詞用法の派生については稿を改めて考察したい。

## 6. まとめ

本稿では、軽動詞構文における動詞*have/take*の意味について考察した。軽動詞*have/take*は、語彙の意味が希薄化・抽象化しているが、Jespersen(1965)やKearns(1988)が述べたような無意味な要素ではない。Haveとtakeでは、結びつくことのできる動詞転換名詞が異なっていることから、それぞれ異なる意味内容を持っていると考えられる。Dixon(1991)、瀬戸(2007)、小西(2016)では、*have/take*軽動詞構文は意図的な行為を表すとされているが、Wierzbicka(1988)、相沢(1999)などで指摘されているように、非意図的な行為を表す場合もある。Norvig and Lakoff(1987)の語彙ネットワーク理論では、*take*の中心義を移動概念を含むものとして、*take*の主要な7つの意味を関連づけて説明しているが、*take*の中心義は移動概念を含まない「つかむ」であると考えられる。中心義「つかむ」からの比喩的な拡張により自己志向の行為を表す*take a walk*のような軽動詞用法が派生する。中心義「つかむ」からメトニミーにより派生した「手でつかんで移動させる」という意味からの比喩的拡張により*take a punch at/ from*のような他者志向の行為や*take a whiff*のような知覚・感覚を表す軽動詞用法が派生する。

## 参考文献

- 相沢佳子(1999)『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合にみる意味の拡大』開拓社。
- 天川豊子(2000)「英語の軽動詞構文について」『言語研究』118: 29-54.
- 安藤貞雄(2005)『現代英文法講義』開拓社。
- Brugman, C. (2001) "Light Verbs and Polysemy," *Language Science* 23: 551-578.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Grimshaw, J. and A. Mester. (1988) "Light Verbs and  $\theta$ -marking," *Linguistic Inquiry*, 19(2): 205-232.
- Jespersen, O. (1965) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part IV, Morphology. London: George Allen and Unwin.
- 勝部愛美(2014)「ハイブリッド文法—軽動詞 have/take の事例—」『人間生活文化研究』24: 181-194.
- Kearns, K. (1988/2002) *Light Verbs in English*. ms. MIT.
- 小西友七(1980)『英語基本動詞辞典』研究社。
- 小西友七(2016)『英語のしくみがわかる基本動詞24』研究社。
- Leech, G. (1989) *An A-Z of English Grammar and Usage*. London: Edward Arnold.
- Live, A. (1973) "The *Take-Have* Phrasal in English," *Linguistics: an International Review* 11(95): 31-50.
- 森山智浩(2008)「英語動詞 take に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育—認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して—」『近畿大学英語研究会紀要』2: 79-98.
- Norvig, P. and G. Lakoff. (1987) "Taking: A Study in Lexical Network Theory," *Proceedings of Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 195-206.
- 岡(2014)「語彙ネットワーク理論における動詞 take の扱いに対する批判的考察」『人間と環境』電子版: 1-12.
- 緒方隆文(2017)「軽動詞構文と意味のネットワーク」『筑紫女学園大学研究紀要』12: 15-27.
- Quirk, R., S Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 瀬戸賢一(編)(2007)『英語多義ネットワーク辞典』小学館。
- 寺澤芳雄(編)(1997)『英語語源辞典』
- Wierzbicka, A. (1988) *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

令和元年(2019)11月11日受理

令和元年(2019)12月31日発行